

## 自己主張・自己抑制についての認知の個人差と 向社会的性についての認知、および向社会的行動との関連

伊藤 順子<sup>1</sup>

### Relationship among the Types of Perceived Self-assertiveness and Self-inhibition, Perceived Prosocial Trait, and Prosocial Behavior

Junko Ito<sup>1</sup>

The purpose of this study was to examine the relation among the types of perceived self-assertiveness and self-inhibition, perceived prosocial trait, and prosocial behavior in preschool children. Thirty-four 5-year-old children were asked to evaluate (1) their self-assertiveness and self-inhibition on the Self-Regulation Scale, and (2) their prosocial trait on the Prosocial Scale. Furthermore, data on children's prosocial behavior were collected from peer assessments. For the data analysis, the children were divided according to their scores on self-assertiveness and self-inhibition into 4 types: high-high, high-low, low-high, low-low. There were differences in perceived prosocial trait according to the types of self-assertiveness and self-inhibition. Also, the high-high children, who perceived themselves as more assertive and more inhibited, were more prosocial than other children. These results suggested that perceived self-assertiveness and self-inhibition are related to perceived prosocial trait and prosocial behavior in preschool children.

**Key Words:** self-assertiveness, self-inhibition, prosocial trait, prosocial behavior, preschool children

向社会的行動は「他者にポジティブな結果をもたらすことを意図した行動」であり (Staub, 1979; Eisenberg-Berg, Cameron, Tryon, & Dodez, 1981), 自己制御機能の産物である (Peterson, 1982; Berkowitz, 1982)。そのため、自己制御機能の獲得が、幼児期から児童期にかけての向社会的行動の発達に関与している (Berkowitz, 1982) と考えられている。

行動の自己制御には、「自分の欲求や意志を明確に持ち、これを他人や集団の前で表現し、主張する」自己主張・実現と、「集団場面で自分の欲求や行動を制御しなければならぬ時、それを抑制する」自己抑制が機能する (柏木, 1988)。仲間に対する向社会的行動と自己主張との関連を検討した研究では、この両者は密接に関連していることが示されている (Barrett & R

adke-Yarrow 1977; Eisenberg-Berg, Cameron, Tryon, & Dodez, 1981; Eisenberg, 1992)。友だちに対する指示的言動が多い主張的な幼児は、仲間との遊び場面で向社会的行動を多く行う (Barrett & Radke-Yarrow, 1977)。また、自分の持ち物を守ったり友だちからおもちゃを取り上げたりするような主張的行動を多く行う幼児は、自発的に援助したり、自分の持ち物を分ける傾向が高く、反対に、これらの主張的行動が少ない幼児は、友だちから援助を求められたり、持ち物を要求された時に、その要請に応じる傾向が高い (Eisenberg et al., 1981)。これらの結果から、自発的向社会的行動が多い幼児は、自己主張が多いことが示唆される。

さらに、首藤 (1995) は、向社会的行動の多い幼児の特徴を明らかにするために、自己主張と自己抑制の両面から幼児の自己制御機能をとらえ、自己制御機

1 宇部短期大学保育学科講師

能の個人差が日常的な向社会的行動とどのように関連するかを検討している。首藤は、幼児の自己主張と自己抑制についての評定(母親評定)、自由遊び時間における向社会的行動の観察を行った。観察に際して、自発的な向社会的行動と依頼に応える向社会的行動は行動に至る認知的過程が異なり、異なるタイプの行動である(Eisenberg & Mussen, 1989)ことから、向社会的行動を自発性(自発・依頼)によって分類した。また、被援助者が大人の場合と仲間の場合では、援助遂行に対する心理的な強制度や、援助の報酬に対する期待度や魅力度が異なり、行動を支える動機に差異がある(Eisenberg, 1992)ことから、向社会的行動を対象(大人・仲間)によって分類した。自己主張と自己抑制の高低から被験者を分類した結果、自己主張も自己抑制も高い幼児、自己主張が高く自己抑制が低い幼児、自己主張も自己抑制も低い個人内では抑制傾向が高い幼児という3つのタイプが明らかにされた。これらのタイプと向社会的行動との関連を検討した結果、自己主張的な行動が多く、自己抑制的な行動が少ない幼児は、他の幼児よりも、仲間に対する自発的な向社会的行動を多く行っていることが示された。このような研究結果から、自己主張、自己抑制の個人差と仲間に対する向社会的行動の関連が示唆される。

上述の研究では、第3者(母親・実験者)評定に基づいて幼児の自己制御機能が検討されている。しかし、自己制御機能の働きは、自分の行動を制御できるか否かという幼児自身の主観的な認知傾向によって左右されると考えられる。そこで、伊藤・丸山・山崎(1999)は、自己主張できるか、自己抑制できるかを幼児自身に評定させ、自己主張・自己抑制についての認知と仲間に対する向社会的行動との関連を検討した。その結果、自己主張と自己抑制についての認知の高低によって、幼児を両高型・主張型・抑制型・両低型に分類できた。さらに、両高型の幼児は他の幼児よりも自発的な向社会的行動が多く、主張型の幼児は他の幼児よりも仲間から援助の依頼を受ける回数が少なかった。自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって、(1)仲間に対する自発的な向社会的行動の頻度、(2)仲間から援助を依頼される頻度に差異があるという結果は、自己主張・自己抑制についての幼児自身の認知が、仲間に対する向社会的行動に関連していることを示唆している。

従来、向社会的行動と幼児自身の認知(自己認知)との関連は、向社会的行動の内面化の観点から検討されることが多かった。「あなたは人のためになることが好きです」、「あなたは人に対して親切です」というように、向社会的行動の原因を子どもの人格特性に帰属するこ

とによって、その後の向社会的行動が促進される(e.g., Walter & Grusec, 1977; Grusec, Kuczynski, Rushton, & Simutis, 1978; 川島, 1991)。これは、向社会的行動の原因を安定した内的要因である人格特性に帰属することによって、他者からの期待に対する認知、期待に応えた自己に対するポジティブな感情が覚醒され、「他者に対して向社会的に関わることができる」という向社会性についての認知が高められるためである(Mills & Grusec, 1989)と考えられている。

上述のような、向社会性についての認知が向社会的行動と関連しているという先行研究の結果(Mills & Grusec, 1989)、さらに、自己主張・自己抑制についての認知の個人差が向社会的行動に関連しているという伊藤ら(1999)の研究結果を踏まえると、自己主張・自己抑制についての認知、向社会性についての認知は、幼児の向社会的行動に関連した自己認知であることが示唆される。そこで、本研究では、幼児における向社会的行動と自己認知との関連を明確にするために、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と、向社会性についての認知との関連を明らかにすることを第1の目的とする。

ところで、伊藤ら(1999)の研究では、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって援助の依頼を受ける頻度に差異があり、主張するが抑制しないと認知している主張型の幼児は、他の幼児よりも仲間から援助の依頼を受ける回数が少ないことが示された。仲間から援助を依頼される回数は、相手から向社会的であると評価されているか否かに関連する可能性がある。つまり、向社会的でないとして評価されている幼児は、他の幼児よりも仲間から援助の依頼を受ける回数が少ないと考えられる。自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって援助を依頼される回数に差異が示されたのは、向社会的行動についての仲間評価を反映していることが予想される。仲間から向社会的であると評価され、「困っているから〇〇して(助けて)欲しい」という援助依頼を受けることによって、友だちはどのような時に困窮するのか、どのような援助が可能かという知識が豊かになる(Eisenberg, 1986)ことを踏まえると、向社会的行動についての仲間評価は、向社会的行動の学習に重要な役割を果たしていることが示唆される。向社会的行動についての仲間評価と自己主張・自己抑制についての認知の個人差との関連を明らかにすることで、向社会的行動を学習しやすい幼児の自己認知の特徴が理解できると考えられる。そこで、本研究では、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会的行動についての仲間評価との関連

を明らかにすることを第2の目的とする。

上述のように、本研究の目的は、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と、(1) 向社会的性についての認知、(2) 向社会的行動についての仲間評価との関連を明らかにすることである。研究を通して、どのような自己認知を持った幼児が、向社会的行動が多いのか、あるいは、少ないのかが明らかになると考えられる。

## 方法

### 被験者

幼稚園の5歳児クラスの男児16名、女児18名、合計34名を被験者とした。

### 実験材料および手続き

自己主張・自己抑制についての認知の評定 首藤 (1995) の「幼児の自己主張—自己抑制に関する質問紙(母親用)」をもとに自己主張、自己抑制評定項目(資料)を作成し、幼児自身に評定を求めた。評定項目は、幼稚園での日常生活における行動を反映しやすいと思われる場面を設定し、図版の中に登場する主人公○○君(ちゃん)は被験者自身とした。幼児に評定を求めるときには、回答選択カード2枚(「主張/抑制する」・「主張/抑制しない」と、回答選択図1枚(「ときどき」と「いつも」)を用いた。自己主張・自己抑制についての認知の評定は、2人の面接者が個別に行った。自己主張・自己抑制についての認知評定の所要時間は1人につき15分程度であった。手順は以下の通りである。

(1) 回答選択図(時々—いつも)の説明を行った後、向社会的行動、および、自己制御に関係のない事例について質問し、課題の遂行の仕方、および、回答選択図の意味を理解していることを確認した。

(2) 評定項目を図版(質問項目図版1枚)と読み聞かせによって提示した後、回答選択カード2枚を提示し、「こんなとき○○君(ちゃん)だったら、△△するかな。それとも◇◇するかな」と、2枚のカードのうちどちらか一方を選択するように求めた。

(3) 選択された回答に関して、その程度を「○○君(ちゃん)は、いつもそうするかな、時々そうするかな」と質問し、回答選択図上で回答するように教示した。

### 向社会的性についての認知の評定

Mills & Grusec (1989) の自己認知評定項目を基に、向社会的性についての認知評定項目を作成した (Table 1)。各々の評定項目は、日常生活における向社会的行動を反映させやすい場面の図版を提示すると同時に、場面の状況を読み聞かせた。図版中に登場する主人公○○くん(ちゃん)は被験者自身とした。評定

Table 1 向社会的性についての認知評定項目

評定項目
1 友だちけんかをしているのを見た時、けんかを止める
2 遊びの中に入っていない友だちを見ると、遊びに誘う
3 遊具を友だちと仲よく使う
4 友だちが困っているときに手伝う
5 友だちがいじめられているのを止めようとする
6 困ったり、悲しそうな友だちを見ると、なぐさめる

項目は各幼児にランダムな順序で提示し、向社会的性についての評定を終えるまでの所要時間は1人につき15分程度であった。なお、子どもは現実の自分の評価と、社会的望ましさの評価を混同する傾向がある (Eisenberg, 1986) ことを考慮し、各評定項目について、向社会的性に対する望ましさの評定を求めた後、向社会的性についての認知の評定を求めた。望ましさ、および向社会的性についての認知の評定には「少し思う」から「とても思う」を4段階で図示した回答選択図を用いた。手順は以下の通りである。

(1) 回答選択図の説明を行った後、向社会的行動とは無関係の事例を用いて質問し、課題の遂行の仕方、および回答法を理解していることを確認した。

(2) 各評定項目を図版とともに提示し、「お友だちが◇◇(困窮状況)の時に、○○君(ちゃん)は△△(向社会的行動)した方がいいと思いますか」と望ましさについての質問を行い、「いいえ」または「はい」の選択を求めた。「はい」と回答した被験者には回答選択図を提示し、「どのくらい△△(向社会的行動)した方がいいと思いますか」と質問し、赤いマグネットを回答選択図上に置くように教示した。

(3) 赤いマグネットを回答選択図上に置いたまま、「○○君(ちゃん)はこのくらい△△(向社会的行動)をした方がいいと思うのね。では、○○君(ちゃん)は、幼稚園でお友だちが◇◇(困窮状況)の時に△△(向社会的行動)をしていると思いますか」と、同様の項目について、向社会的性についての認知の質問を行い、「いいえ」または「はい」の選択を求めた。「はい」という回答に対して、「どのくらい△△(向社会的行動)をしていると思いますか」と質問し、青いマグネットを回答選択図上に置くように教示した。

### 向社会的行動についての仲間評価

向社会的行動についての仲間評価の評定項目は、向社会的性についての認知評定項目に対応する6項目であった。友だちの日常の向社会的行動を想起させるために、各項目の内容に対応する援助場面を描いた図版を提示した。また、幼児の場合、限られた友だちの名前しか想起できず、その中で仲間指名を行う可能性が

考えられるので、クラスの一人ひとりが個別に写った写真を用意し、仲間指名カードとして用いた。なお、向社会的性についての認知の評定と向社会的行動についての仲間評価の評定は、異なる実験者によって約1週間の間隔をおいて実施した。手順は以下の通りである。

(1) 仲間指名カードを提示し、自分のカードを選択するように求めた。次に、残りのカードを指し、「これから、□□組（被験者と同じクラス）のお友だちについて教えてね。いつもお友だちはどうしているかよく考えて答えてね」と教示した。

(2) 図版を提示し、「□□組でいつも△△（向社会的行動）をしているお友だちは、この中（仲間指名カード）のどれかな。△△（向社会的行動）をしていると思うお友だちを3人選んでね。」と教示し、それぞれの評定項目に示された行動を多く行う友だち3名の指名を求めた。

## 結果

### 1. 自己主張・自己抑制についての認知、向社会的性についての認知、向社会的行動間の相関係数

自己主張質問項目、自己抑制質問項目に関して、選択された回答からこれを1点から4点までに得点化した（資料）。得点が高いほど、自己主張および自己抑制についての認知が高い傾向を示す。さらに、自己主張尺度、自己抑制尺度別に6つの質問項目の得点を合計し、各々を自己主張得点、自己抑制得点とした（得点範囲6-24）。

向社会的性についての認知に関しては、「いいえ（向社会的行動をしていない）」を選択したものを0点、「はい（向社会的行動をしている）」を選択したものに対しては、その程度によって「少し思う」から「とても思う」を1点から4点に得点化し、6項目の合計を向社会的性についての認知得点とした（得点範囲0-24）。得点が高いほど向社会的であると認知していることを示す。

向社会的行動についての仲間評価に関しては、6項目の行動について33名の友だちから指名された回数を個

人ごとに得点化し、その合計を仲間評価に基づく向社会的行動得点とした（最少5点、最多43点）。

自己主張・自己抑制についての認知、向社会的性についての認知、向社会的行動（仲間評価）の相関係数を算出した（Table 2）。その結果、向社会的性についての認知得点と向社会的行動得点との間に有意な相関がみられた（ $r=.33, p<.05$ ）ことから、向社会的性についての認知が高い幼児ほど、仲間からも向社会的行動を多く行うと評価されていることが示された。また、自己主張得点と自己抑制得点の間には有意な相関はみられないが、自己主張得点、自己抑制得点とともに、向社会的性についての認知得点（自己主張  $r=.45, p<.01$ 、自己抑制  $r=.57, p<.01$ ）、向社会的行動得点（自己主張  $r=.34, p<.05$ 、自己抑制  $r=.32, p<.10$ ）と有意な、あるいは、有意な傾向をもった相関があった。

相関分析の結果から、以下の2点が示唆される。第1に、自己主張と自己抑制との間に相関がみられないことから、自己主張が高い幼児が自己抑制も高い、あるいは自己主張が低い幼児が自己抑制も低いとは限らず、これら2側面の高低によって、自己主張・自己抑制についての認知に個人差があることが示唆される。第2に、自己主張と自己抑制についての認知がともに、向社会的性についての認知や向社会的行動と関連があることから、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって、向社会的性についての認知や向社会的行動に差異があることである。

### 2. 自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会的性についての認知、向社会的行動との関連

自己主張・自己抑制についての認知の個人差を明らかにするために、自己主張得点と自己抑制得点の高低に基づいて被験者の分類を行った。具体的には、自己主張得点と自己抑制得点とを標準化し、これをデータとして群平均法によるクラスター分析を行った。その結果、自己主張得点（ $F(3,30)=45.42, p<.01$ ）・自己抑制得点（ $F(3,30)=19.82, p<.01$ ）の差異

Table 2 自己主張・自己抑制についての認知、向社会的性についての認知、向社会的行動間の相関係数

	自己認知		向社会的行動	
	自己主張	自己抑制	向社会的性	(仲間による評価)
	M=17.41	M=18.29	M=16.97	M=18.00
	SD=3.16	SD=2.68	SD=5.46	SD=9.96
自己認知	自己主張	0.13	.45**	.34*
	自己抑制		.57**	.32+
	向社会的性			.33*

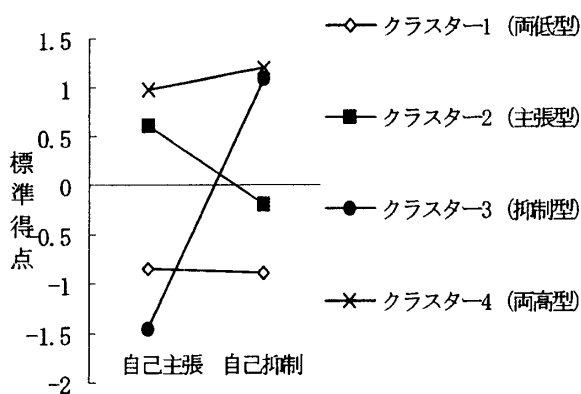


Figure 1 各クラスターの標準得点

に特徴づけられる、4つのクラスター(両高型・抑制型・主張型・両低型)が特定された (Figure 1)。構成人数は、両高型は6名、抑制型は4名、主張型は14名、両低型は10名であった。

次に、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会性についての認知との関連 (Figure 2) を検討するために、向社会性についての認知得点について、自己主張・自己抑制についての認知の個人差を要因とする分散分析を行った。その結果、自己主張・自己抑制についての認知の個人差の主効果がみられ ( $F(3, 30) = 11.76, p < .01$ )、Tukey法によって多重比較を行ったところ、両高型は両低型や主張型よりも、抑制型や主張型は両低型よりも向社会性についての認知得点が高いことが示された。これらの結果から自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって、向社会性についての認知に差異があることが示された。

さらに、自己主張・自己抑制についての認知の個人差による向社会的行動についての仲間評価のちがい (

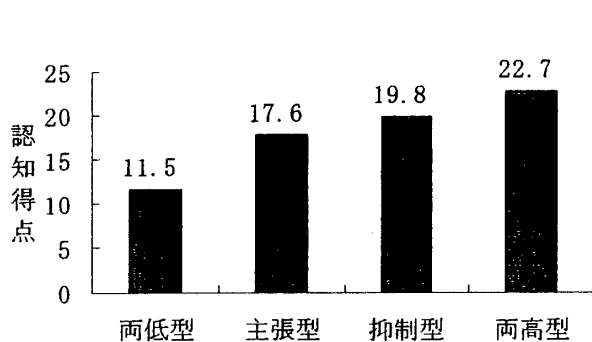


Figure 2 自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会性についての認知

Figure 3) を検討するために、向社会的行動得点について、自己主張・自己抑制についての認知の個人差を要因とする分散分析を行った。その結果、自己主張・自己抑制についての認知の個人差の主効果がみられ ( $F(3, 30) = 4.21, p < .05$ )、Tukey法による多重比較を行ったところ、両高型は、他の幼児よりも仲間評価に基づく向社会的行動得点が高かった。両高型の幼児は、他の幼児よりも仲間から向社会的行動を行うと評価されている。

### 考察

本研究の第1の目的は、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会性についての認知がいかに関連しているかを明らかにすること、第2の目的は、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会的行動についての仲間評価がいかに関連しているかを明らかにすることであった。

第1の目的に関して、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって向社会性についての認知に差異があり、両高型は向社会性についての認知が高く、両低型は向社会性についての認知が低い傾向が示された。自己認知に関して、従来の研究では、向社会性についての認知と向社会的行動との関連 (Mills & Grusec, 1989)、自己主張・自己抑制についての認知と向社会的行動の関連 (伊藤他, 1999) が示されていたが、自己主張・自己抑制についての認知と向社会性についての認知が関連しているか否かは明確ではなかった。これに関連し、本研究では、自己主張および自己抑制についての認知はともに向社会性に関する認知と相関があり、かつ、両高型の幼児は両低型や主張型と比べて向社会性についての認知も高いことから、自己主張・自己抑制に対する認知の個人差によって、向社会性につ

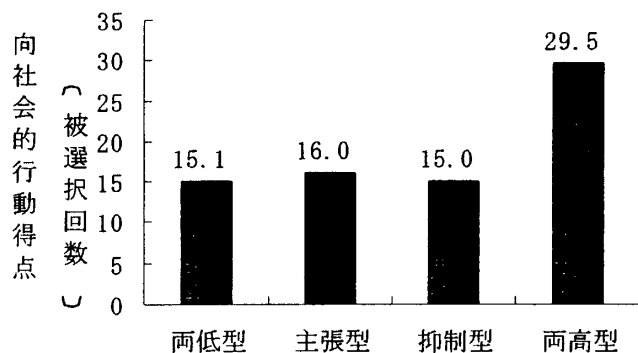


Figure 3 自己主張・自己抑制についての認知の個人差と向社会的行動 (仲間評価)

いての認知に差異があることが示された。

第2の目的に関して、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって、向社会的行動についての仲間評価に差異があり、両高型の幼児は、他の型の幼児よりも、仲間から向社会的行動を行うと評価されていることが示された。この結果は、自己主張と自己抑制に対する認知の高い両高型の幼児は、遊び場面で仲間に対する自発的向社会的行動が多い(伊藤他, 1999)という先行研究の結果を、仲間評価の側面からも裏づけるものである。自己主張・自己抑制に対する認知の個人差と、仲間に対する向社会的行動との間に関連があることが示唆される。

ところで、本研究では、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって仲間から援助の依頼を受ける頻度に差異があった(伊藤他, 1999)のは、仲間から向社会的であると評価されているか否かと関連しているのではないかという予想を立てた。しかし、両高型の幼児は向社会的行動についての仲間評価が高いことが示されたものの、両高型以外の幼児には、向社会的行動についての仲間からの評価にちがいがみられなかった。よって、主張型の幼児が、必ずしも向社会的でない仲間から評価されているわけではなく、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって援助の依頼を受ける頻度に差異があるのは、向社会的行動についての仲間評価に起因するという予想は検証されなかった。

援助の依頼を受ける頻度は、遊び場面における仲間との相互作用の質や量に左右される可能性がある。例えば、仲間との協調的な関わりが少ない幼児は、援助の依頼を受ける回数が少ないことが予想される。仲間との仲間との相互作用との関連を検討した研究によれば、自己主張や自己抑制の機能と関連がある自己主張性(自分の意見や意志を言葉で適切に表現すること)や協調性(友だちの立場を尊重すること)の個人差によって、仲間集団内での活動内容や活動量が異なる(小林, 1998)ことが示されていることから、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって援助の依頼を受ける頻度に差異があったのは、仲間との相互作用に起因する可能性が示唆される。遊びは幼児の生活の大半を占めるものであり、仲間との相互作用の中で向社会的行動を学習することが多い(Eisenberg, 1989)。今後、自己主張・自己抑制についての認知の個人差と遊び場面における仲間との相互作用の関連を検討することで、自己主張、自己抑制の認知の個人差によって援助の依頼を受ける頻度に差異がある(伊藤他, 1999)のはなぜか、さらに自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって向社会的行動の学習機

会に差異があるか否かを解明する手がかりが得られると考えられる。

上述のように、本研究では、自己主張・自己抑制についての認知の個人差によって、向社会的性についての認知、および向社会的行動についての仲間評価に差異があることが示された。これらの結果は、自己主張・自己抑制についての認知と向社会的性についての認知は、幼児の向社会的行動に関連した自己認知であることを示しており、自己主張・自己抑制についての認知、向社会的性についての認知が高い幼児が、仲間に対する向社会的行動が多いことが示唆される。

## 引用文献

- Berkowitz, M. W. 1982 Self-control development and relation to prosocial behavior: A response to Peterson. *Merrill-Palmer Quarterly*, 28, 223-236.
- Eisenberg, N. 1986 Altruistic emotion, cognition, and behavior. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- アイゼンバーグ, N. 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子(訳) 1995 思いやりのある子どもたち—向社会的行動の発達心理— 北大路書房.
- (Eisenberg, N. 1992 *The Caring Child*. New York: Harvard University Press.)
- アイゼンバーグ, N. & マッセン P. 菊池章夫・二宮克美(訳) 1991 思いやり行動の心理学 金子書房.
- (Eisenberg, N. & Mussen P. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. New York: Cambridge University Press.)
- Eisenberg-Berg, N., Cameron, E., Tryon, K., & Dodez, R. 1981 Socialization of prosocial behavior in the pre-school classroom. *Developmental Psychology*, 17, 773-782.
- Grusec, J. E., Kuczynski, L., Rushton, J. P., & Simutis, Z. M. 1978 Modeling, direct instruction, and attributions: Effects on altruism. *Developmental Psychology*, 14, 51-57.
- 伊藤順子・丸山愛子・山崎晃 1999 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連. *教育心理学研究*, 47, 160-169.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会
- 川島一夫 1991 愛他行動における認知機能の役割—その状況要因と個人内要因の検討— 風間書房.
- 小林真 1998 幼児の社会的行動における自己主張性と協調性の役割 風間書房.

Mills, R. S. E., & Grusec, J. E. 1989 Cognitive, affective, and behavioral consequences of praising altruism. *Merrill-Palmer Quarterly*, **35**, 299-326.

Peterson, L. 1982 Altruism and the development of internal control: An integrative model. *Merrill-Palmer Quarterly*, **28**, 197-222.

Staub, E. 1979 Positive social behavior and morality II :

Socialization and development. New York: Academic Press.

首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制. *筑波大学発達臨床心理学研究*, **7**, 77-86.

Walters, G. C. & Grusec, J. E. 1977 Punishment. San Francisco: W. H. Freeman.